

2019/05/13

宮本隆司 いまだ見えざるところ

MIYAMOTO Ryuji Invisible Land

2019年5月14日（火）－ 7月15日（月・祝）



〈ソテツ〉より 2013年

インクジェット・プリント 作家蔵

©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery

Photography / Film

展覧会概要

東京都写真美術館では、現在も国内外の美術展などで発表を続けている宮本隆司の個展を開催します。宮本隆司は個展「建築の黙示録」によって広く知られる存在となり、建築空間を題材にした独自の作風は国際的に高い評価をうけています。

近年では建築空間を捉えた写真作品の発表だけではなく、両親の故郷である徳之島でアートプロジェクトのディレクターとして取り組むなど、その活動に新たな展開を見せています。本展覧会では初期の作品から徳之島で撮影された作品を通して、人間とその生活をしている場について展観いたします。

作家略歴

宮本隆司 MIYAMOTO Ryuji (1947-)

東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。建築雑誌の編集部を経て、1975年写真家として独立。86年、建築の解体現場を撮影した〈建築の黙示録〉、88年、香港の高層スラムを撮影した〈九龍城砦〉で高い評価を受ける。89年に第14回木村伊兵衛写真賞を受賞。96年、第6回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展に参加し、阪神淡路大震災によって破壊された建築物を撮影した写真を展示して金獅子賞を受賞。2004年、世田谷美術館で個展を開催ほか国内外のグループ展にも数多く出品している。05年、第55回芸術選奨文部科学大臣賞、12年 紫綬褒章受章。

出品作品

シリーズ〈建築の黙示録〉、〈Lo Manthang (ロー・マンタン) 1996〉、〈東方の市 (とうほうのまち)〉、〈塔と柱〉、〈シマというところ〉、〈ソテツ〉、〈面縄ピンホール 2013〉ほか。

出品点数：計 112 点。※作品リストと出品点数が異なります

展示構成

都市をめぐって

宮本は写真家としてデビューして以来、建築や建築が創り出す都市の風景を捉えた作品を数多く発表してきました。最初のパートでは、1970年代以降に撮影された都市を捉えたシリーズから、選りすぐられた作品を紹介します。

さらに深まる都市の背後の闇の中で、
光と感光材の出会いが増大することはあっても無くなることはないと思う。

(「序」『新・建築の黙示録』平凡社 2003年)

〈建築の黙示録〉



〈建築の黙示録〉は宮本にとっての代表作の一つであるシリーズです。最初に 1988年に写真集『建築の黙示録』が出版されました。今回出品する作品は 2003年に出版された写真集『新・建築の黙示録』に含まれる6点です。これは恵比寿ガーデンプレイスの前身であるサッポロビール恵比寿工場の解体作業の間に撮影されたものです。宮本は解体の始まる直前まで6年間、隣接するマンションに住んでいた縁もあり、1年かかった解体工事を長期間記録していました。

《サッポロビール恵比寿工場》〈建築の黙示録〉より 1990年
ゼラチンシルバー・プリント 作家蔵

©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

〈Lo Manthang (ロー・マンタン) 1996〉



〈Lo Manthang 1996〉より 1996年
ゼラチンシルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

1996年5月、宮本は詩人・佐々木幹郎の誘いを受け、7日かけてネパール・ムスタンの城砦都市ロー・マンタンに赴きます。標高3,780mに位置し過酷な気象条件に晒された同地は、1991年まで外国人の入域が禁止され、電気・ガス・上下水道などの近代都市設備は無く、1996年当時交通手段は徒歩または馬に限られており、まさに秘境とも言うべき様相を呈していました。城内は王宮を中心に、チベット仏教寺院・僧院が建ち並び、住居がその隙間を埋める入り組んだ作りで、人々は城壁の外周で麦・蕎麦の栽培や羊の放牧を行い、衣食住を自給自足しています。9日間に亘る滞在の間、4×5の大判カメラを携え撮影は行なわれましたが、宮本は絶えず高山病に苛まれ撮影道中の記憶も定かでなく、再訪を誓ったものの機会を逸したまま20年以上の歳月が流れました。

〈東方の市 (とうほうのまち)〉



《Can Tho》〈東方の市〉より 1992年
ゼラチンシルバー・プリント
東京都写真美術館蔵

『文藝』に1991年～92年にかけて掲載されたシリーズ。1992年にギャラリー・ヴェリダの個展で展示されました。沖縄や徳之島といった日本の島を含む、アジア地域の街を捉えた作品で、〈建築の黙示録〉や〈九龍城砦〉と同期的に撮影されたものですが、1992年の個展以来展示される機会のなかった作品です。



〈塔と柱〉

ジョルジュ・デ・キリコの塔の絵から想起され撮影したシリーズで、建設途中のスカイツリーをピン・ホールカメラで捉えた作品です。電信柱と電線を敢えて一緒に入れて撮ることによって、シュルレアリストであるキリコへのオマージュになると考えられたものです。

《Tokyo》〈塔と柱〉より 2011年

発色現像方式印画 作家蔵

©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

シマというところ

宮本は2014年に「徳之島アートプロジェクト2014」を企画し、自身も作家として出品しました。宮本の両親は徳之島出身であり、幼少の一時期に生活していましたが、自身のルーツである徳之島について作品発表することはありませんでした。しかしプロジェクトを機に島へ通い続けることによって、島が共同体としてのシマの連なりであることに気づきました。奄美地方では「シマ」は島ではなく、集落ごとの小さな共同体を示す言葉です。シマに暮らす人々と場を宮本の眼を通して見つめます。

人々は自らの集落をワッキヤシマと呼ぶ。ワッキヤは我らであり、シマは島ではなく小さな共同体のことである。祭りも葬式もシマの皆が助けあって行う。

《平土野 Hedono》

〈シマというところ〉より 2010年

インクジェット・プリント 作家蔵

©Ryuji Miyamoto

Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography /





《サトウキビ》 2018年
シングル・チャンネル・ビデオ (4分21秒) 作家蔵
©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery
Photography / Film

〈シマというところ〉

徳之島の集落に暮らす住民たちのポートレートを紹介します。



左) 《面縄 Omonawa》〈シマというところ〉より 2010年
右) 《金見 kanami》2013年 〈シマというところ〉より
ともにインクジェット・プリント
東京都写真美術館蔵

〈ソテツ〉

2014年に開催された「徳之島アートプロジェクト2014」のために撮影された写真。徳之島にはソテツの群生地があり、その新芽のクローズアップを撮ったものです。ソテツは南方の島の明るいイメージを持つ植物ですが、この地方にとっては、万が一の飢餓に備えて植えられている「救荒食品」として知られています。この島の風土や歴史を象徴する存在です。

〈ソテツ〉より 2013年 インクジェット・プリント
©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery
Photography / Film



〈面縄ピンホール〉



《面縄ピンホール 2013》 2013 年
発色現像方式印画
東京都写真美術館蔵

2歳過ぎまで^{おもなわ}面縄（徳之島の伊仙町）で暮らした宮本。その頃に見たはずの海辺に自作の大型ピンホールカメラを設置し、内部に作家自身が入り込んでの撮影した作品です。作家は、「ピンホールカメラの暗闇に身を横たえていると遠い昔の、わたしが乳幼児だったころの記憶が戻ってくるような気がした。微細なピンホールを通して入る微かな太陽の光を浴びていると、面縄シマの父の家の前にひろがるイリバアの波打ち際で海に浸かった遥かな記憶が蘇るように思えた」と語っています。

関連イベント

鼎談

登壇者：倉石信乃（明治大学教授）×林道郎（美術史・美術批評）×宮本隆司

日時：2019年5月25日（土）14:00-16:00

対談

登壇者：佐々木幹郎（詩人）×宮本隆司

日時：2019年6月22日（土）14:00-15:30

上記2つとも、東京都写真美術館1階ホール（整理番号順入場／自由席）、定員190名

※当日10時より1階受付にて整理券を配布します

宮本隆司ワークショップ「見るためには闇が必要だ」

ピンホールカメラを制作し撮影・現像を行うワークショップです

日時：2019年6月1日（土）10:00-18:00

対象：18歳以上

定員：20名 事前申込制

参加費：4000円 ※申込方法など詳細は当館ホームページでご確認ください

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

『宮本隆司 いまだ見えざるところ』

本展開催に合わせ、関連書籍（当展図録）を平凡社より発行。主な出品作品図版と作家・研究者による論考を収録。全 224 頁。当館ミュージアム・ショップほか、全国書店にて販売。

価格：3,240 円（税込）。判型：B5 変型。

執筆者：倉石信乃（明治大学教授）、キャリー・クッシュマン（ウェルズリー大学デービス美術館学芸員）、藤村里美（東京都写真美術館）

開催概要

展覧会名[和] 宮本隆司 いまだ見えざるところ

展覧会名[英] MIYAMOTO Ryuji: Invisible Land

主催 東京都 東京都写真美術館／朝日新聞社

特別協力 キヤノンマーケティングジャパン株式会社

会場 東京都写真美術館 2 階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし 7 月 15 日[月・祝]は開館）

観覧料 一般 700（560）円／学生 600（480）円／中高生・65 歳以上 500（400）円

※（ ）は 20 名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害手帳をお持ちの方とその介護者は無料、第 3 水曜日は 65 歳以上無料

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版を掲載の際は、必ず「作品キャプション、制作年、所蔵」および下記の表記をお願いします。

* 作家蔵には ©Ryuji Miyamoto Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film を明記

図版のトリミング、文字掛け等の加工はできません。

このリリースのお問い合わせ先

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会担当 藤村里美 s.fujimura@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp

展覧会図録より抜粋

宮本隆司「いまだ見えざるところ」より

わたしは東京、世田谷区玉川奥沢で生まれた。家族が戦災で焼け出され、親戚の家に間借りした二階部屋での出産だった。生後、四ヶ月になった夏、父と母の故郷である鹿児島県、奄美群島の徳之島に移り住んだ。父は仕事の都合でひとり東京に残り、母と姉とわたしの三人は米軍政下にあった島へ移った。1953年のクリスマスに返還されるまで、奄美群島は沖縄とともに米軍に直接統治されていた。父方の祖父が亡くなり祖母が空襲で焼かれた家の跡地にひとりで暮らしていたので、母はその生活を手助けするために行ったようだ。

父の家は、徳之島で最も南に位置する面縄という海辺の集落にあった。家の間近に、サンゴが細かい砂になった白い砂浜が波打際までつづき、太平洋を望むサンゴ礁に囲まれた浅瀬がひろがっている。アオウミガメやアカウミガメが産卵のために上陸する亜熱帯の海岸である。

父の家のあたりの浜辺を、集落の人々はイリバアと呼んでいた。太陽が沈む西の浜辺で、陽が入り浜だからイリバア。朝日の上がる東の浜は、アガレバアと呼ぶ。丘の上の畑でサトウキビを栽培し、サンゴ礁の海で漁をする半農半漁の農家であった。

母の実家は伊仙という、すぐ隣の集落で母方の祖父母はまだ健在であった。面縄集落には親類縁者がたくさん住んでいて、琉球文化の影響が生活の隅々に残る血縁関係の濃密な、南島の集落の暮らしであった。人々は自らの集落をワッキヤシマと呼ぶ。ワッキヤは我らであり、シマは島ではなく小さな共同体のことである。祭りも葬式もシマの皆が助けあって行う。シマの人々に囲まれて小さなわたしは大きくなったのだろう。

二歳過ぎまで面縄の集落で暮らしたわたしたち母子三人は、面縄の海辺から熊本の三角港まで米軍統治の法を無視して、ボートピープル難民のように密航船で太平洋と東シナ海を渡った。当時、北緯 30 度線を超える渡航や物流は禁じられていたため、ヤミブネと呼ばれる密航船が島々と九州を行き来していた。密航船で渡るための船賃として祖父が樽詰めの黒砂糖を幾つか用意してくれた。本土に運ぶと高値で取引される黒砂糖が通貨の代わりであった。監視艇を避けて島伝いに小舟で外洋に行く密航は大変な危険を伴い、死ぬ思いをしたと母はいう。

東京で移り住んだのは、警察官だった父が確保した新宿区戸山町の戸山ハイツ脇に残された旧陸軍兵舎を改造した警視庁の木造住居であった。しばらくして、わたしは小児結核を発病した。近くに住む大人の結核患者から感染したらしい。米軍統治下の島での結核予防対策は皆無であった。乳幼児の予防接種はなにもなく、親の予防接種に対する知識も欠けていた。無垢なまま戦後の混乱期の東京の、病原菌にまみれた集合住宅に紛れ込んだのである。

ここまでの、わたしが乳幼児のころの記述は、すべて後から聞いたり調べたり大人になってから見たことである。生まれてすぐ島に行って暮らしたことは事実なのだが、記憶としてはなにも残っていない。確かにそこにいたはずなのに記憶がない。わたしの記憶が生まれる前の、わたしなのである。

そして、わたしの記憶にある最初の光景は、飯田橋にあった東京警察病院に入院して、看護婦に抱かて

屋上から見た神楽坂あたりの街の眺めである。戸山ハイツの警視庁住宅の二階の窓から見えた新宿伊勢丹の赤いネオンの広告塔も覚えている。明治通りを昭和天皇の母、貞明皇后の葬儀馬車行列や、朝鮮戦争の米軍戦車を載せたトレーラーが轟音で進むのも見た。

飯田橋や新大久保駅からほど遠からぬ界隈で見た原風景と、徳之島で乳幼児のわたしが見たに違いない海辺の風景との、あまりの違いに、いまでは戸惑うばかりである。両親は戦後の東京で生活してゆくのに必死で感慨にふける暇などなかったろう。

いまだに見えない、父と母の島で暮らした乳幼児のころに見たはずの風景。サンゴ礁の海辺で海水に浸かった遠い体験の記憶を蘇らせるには、どうしたらいいのだろう。そう思って撮影したのが「面縄ピンホール 2013」である。

海辺に自作の大型ピンホールカメラを設置して、その内部にわたし自身が入り込んでの撮影である。ピンホールカメラの暗闇に身を横たえていると遠い昔の、わたしが乳幼児だったころの記憶が戻ってくるような気がした。微細なピンホールを通して入る微かな太陽の光を浴びていると、面縄シマの父の家の前にひろがるイリバアの波打ち際で海に浸かった遙かな記憶が蘇るように思えた。

藤村里美「旅の目的地」より（一部抜粋）

2014年11月10日に東京藝術大学美術学部特別講演会で宮本隆司の講演会を聴講した。「廃墟以前／廃墟以後」と題された講演の冒頭で「自分は廃墟を撮ってきたわけではない」という趣旨の発言をしていたことを、印象深く記憶している。それまで宮本の作品に「廃墟」という言葉がしばしば使われていることを違和感なく受け入れていたのだが、講演を聴くうちに、長年自分が受け入れてきたイメージを訂正しなければならないということに気がついた。本来「廃墟」とは建物や集落が放置され、荒れ果てた様子を指す言葉である。宮本の代表的なシリーズである「建築の黙示録」は建物が解体される過程を捉えたものであるし、「九龍城砦」はメイズ（迷路）のような構造ではあるが、撮影された当時はまだ実際に人が生活している場所であった。写真集『建築の黙示録』の中に収められている磯崎新の「廃墟論」、また20世紀末に起こった廃墟ブームの影響もあって、『九龍城砦』、『建築の黙示録』の2つの写真集の発表以降、宮本の作品を象徴する言葉として「廃墟」が使われることになった。自身の持っていた宮本作品のイメージの齟齬から、本展覧会の企画の端を発したことを記しておきたい。

今回、この展覧会を企画するにあたり、廃墟をイメージさせる都市の作品だけではなく、近年取り組んでいる徳之島に関連したシリーズの作品も含めて考えたい、と申し出たところ、作家の意向とも合致することになった。幾度も打ち合わせを重ねていくうちに、自分も作家も予期しなかった側面を発見（作家本人にしてみれば発見ではなく、回顧したに過ぎないかもしれないが）し、出品作品が決まっていた。